

---

# 茨城県南地域ゆかりの史料にみる前近代異国観の諸事例

伊 川 健 二

---

## 要約

本稿は、平安時代末期から江戸時代にかけて成立した、茨城県南地域との関わりがある史料のなかで、当該期の異国観を垣間見ることができる6点について、時系列にそって紹介および分析をしたものである。第1章は、中世前期以前に成立した『将門記』と『沙石集』で、前者には渤海から契丹への王朝交替への言及があり、後者には天竺渡航を志した明恵の伝説などが収められている。第2章では中世後期とりわけ南北朝時代の『神皇正統記』および『法雲寺史料』を検討する。両者は、ともに小田治久の密接な関与が背景にある点で共通し、前者は治久が北畠親房を小田城へ招き、後者は法雲寺の創建を助成し、実質的な開山といえる復庵宗己<sup>ふくあんそうき</sup>を招請した。近世の関係史料はほかにも散見するなか、『東韃地方紀行』と『訂正増訳采覧異言』を取りあげる。日本の伝統的な異国観として、世界を天竺・震旦・本朝に分割する三国観があるが、この時期になると、こうした枠組みを超えた知識が流入し、世界のほぼすべてを網羅することになる。その一方で、情報源に着目すると、三国観のうち天竺の情報は震旦（中国）を経由して日本へ入ってきたと考えられる点で、二元的であるのに対し、『訂正増訳采覧異言』の世界観は西洋・漢土・本朝の書物に基づく点で三元的な視覚で構成されたものといえる。

キーワード：異国観、沙石集、神皇正統記、法雲寺史料、訂正増訳采覧異言

## はじめに

茨城県南地域における前近代の異国観を代表する資料といえば、近世後期に成立した『訂正増訳采覧異言』であろう。その名が語るように、この資料は新井白石の『采覧異言』を増補する形で成立しているが、増補部分の割合が多く、実質的には独自の著作物とみなしうるものであるとともに、幕末の海外情報分析にも大きく影響した。本稿で検討する素材は、『訂正増訳采覧異言』に加え、『将門記』、『沙石集』、『神皇正統記』、『法雲寺史料』、および『東韃地方紀行』である。これらのうち、『将門記』は、茨城県南地域というよりは県西地域との関係が深いものであるが、これらをあわせて時系列に従って配置した。

前掲史料の多くは著名ではあるが、異国観の素材としては必ずしも議論の俎上に上ってきたものではない。県南地域を中心とした前近代の海外情報の需要や蓄積を物語る事例として、これらを概観する作業は必須である。対外関係史の潮流は、交易や留学、布教など、直接的な人的交流に重き

を置くが、本稿は其中で必ずしも十分に意識されてはこなかった、情報交換の視点から県南地域を捉えなおそうとする試みである。

本稿のもうひとつの試みは、自治体史などにおける郷土史料蓄積の成果を、歴史学、国文学などの成果と関連づけることにある。今年度〔雨谷昭編修2015〕が発行され、中世土浦の関係史料の概観が容易になったことには一言を要しよう。同史料集は現在刊行中であることもあり、本稿の内容と直結するのは『沙石集』のみであるが、今後の内容が注目される。しかしながら、本稿で検討する他の関係史料について、必ずしも原典へ行きつく作業が容易ではなかったこと、個別の歴史事象を位置づける重要性を感じた経験から、それらの関係研究および、情報整理を通じて到達した私見を交え、今後の郷土史研究、教育に資するものとする点に、本稿の第二の目的を設定したい。

## 1. 中世前期以前の異国観

### (1) 平将門伝説にみる異国

諸事例の冒頭に平将門を検討する。平将門は、一族の内紛を契機として承平5(935)年2月に軍事活動を開始し、国衙への反乱とみなされる時期を経て、天慶2(939)年12月新皇を自称することで京都の朝廷への反乱とみなされ、2か月ののち藤原秀郷および平貞盛を中心とした追討軍に討たれた。一連の戦闘を一般に承平の乱という。2か月の間とはいえ、天皇と対置する称号を名乗ったことの意義を重く見、彼の政権を京都の朝廷からは事実上独立した武士の政権たる「東国国家」の起源とみなす見解もあり、その余波は小さくない。

平将門は終始現在の茨城県南部に拠点を置き、関係史跡が坂東市ならびに常総市に存在する。坂東市岩井(石井)には、國王神社ならびに石井の営所跡とされる島広山がある。「石井の営所」は将門の本拠地のひとつとされ、『将門記』には承平7年の12月初頭頃、子の春丸が将門を裏切り、平良兼の使者として将門を訪れ、その偵察情報に基づいて良兼が石井を襲撃し、反撃に逢う件(〔岩井市史編さん委員会編1996〕40-2ページ)に登場する。

ところで、承平の乱に先立つこと約30年前に、大宰府で死を遂げた菅原道真と平将門との伝説上の関係は、先行研究のなかでもしばしば議論されている。天慶2(939)年12月、将門は新皇を自称することになるが、その契機は八幡大菩薩の使者と称する巫女のお告げであったと『将門記』は伝えている。該当部は「奉授朕位於蔭子平将門、其位記、左大臣正二位菅原朝臣靈魂表者、右八幡大菩薩、起八軍奉授朕位、(〔岩井市史編さん委員会編1996〕54ページ)」とあり、「菅原朝臣」すなわち道真の靈魂が上表することで、新皇の位を与えられると、この巫女は伝えている。このことから、たとえば、義江彰夫氏は、道真の靈魂は怨霊信仰の文脈で、清涼殿に雷を落とし、醍醐天皇を死の病へ追い込んだと信じられた点で反王権の力とみなしうるもので、その意味で承平の乱に類似すると指摘し(〔義江彰夫1994〕)、網野善彦氏は将門が「天照大神と異なる武神八幡神の託宣、『本天皇』に対する叛逆者菅原道真の権威を背景に即位し(〔網野善彦2008〕130ページ)」たと位置づけ、東国国家の起源としての将門政権の独自性を強調する。

川尻秋生氏は、こうした伝説について「彼(道真・伊川補)の子で、道真の靈魂と会話したこと

があると噂された菅原兼茂が（『扶桑略記』延長五年十月是月条）、承平年間の後半、常陸介として下向した事実（『政事要略』巻二十七）が影響を及ぼした（[川尻秋生2009] 15ページ）」と推測する。常総市の<sup>おおのこう</sup>大生郷天満宮の所伝によると、同社は菅原道真の三子景行が常陸介として赴任した時に創建したとされ、そのことを伝えたとされる刀研石もある。『尊卑分脈』によると、兼茂（第8子）、景行（第3子）ともに道真の子であり、いずれも常陸介となっている。川尻氏が指摘するように、兼茂に限定しうるか否かはおくとして、義江・網野両氏が指摘する時代背景とは別に、当該地域の具体的動向が将門伝説の形成に影響した可能性は否定しえまい。

この乱を詳述した同時代史料は皆無とされる。先ほどからもしばしば触れている『将門記』が、比較的近い時代に成立したと考えられ、基本史料とみなされている。そのテキストは、『新編日本古典文学全集』などで容易に親しむことができるが、[岩井市史編さん委員会編1996]には、『真福寺本』『楊守敬旧蔵本』『将門略記』の影印、注釈、解説等がまとめられている。このうち『真福寺本』では、末尾近くに「天慶三(940)年六月中記文」という記述があるため、将門討死に近いこの年次を『将門記』成立の年とみる説がある一方で、「承德三(1099)年正月廿九日」付の奥書があることから、乱から160年程経た時点ではじめて編まれたとする見解もある。この『将門記』において異国観はどのように表現されているであろうか。

新皇となった将門は、次のような勅を発する。「武弓之術既助両朝、還箭之功且救短命、将門苟揚兵名於坂東、振合戦於花夷、今世之人必以撃勝為君、縦非我朝、僉在人国、如去延長年中大赦契王、以正月一日討取渤海国、改東丹国領掌也、盍以力虜領哉、（[岩井市史編さん委員会編1996] 57ページ）」というのがその文面である。渤海が「延長年中（日本の延長4年、西暦926年）」に「大赦契王（耶律阿保機）」によって滅ぼされ、「東丹国」を建国したことに言及し、将門が武力を背景に政権を確立したことと正統性を、彼の新皇即位から13年前に大陸で起こった渤海から契丹への王朝交替の例に求めている。網野氏はこの文面に「列島東部と北東アジアとの深い結びつき」さえ読み取っている（[網野善彦2008] 130ページ）。さらに同じ勅において、自らの軍の士気を「念可凌高祖之軍」と表現している。『将門記』にしばしば『漢書』が引用されているところから、「高祖」は前漢の初代皇帝劉邦だと考えられる。以上のように、将門の勅が渤海から契丹への王朝交替に言及し、その軍の士気を劉邦のそれに劣らないとする点は、将門政権の国際的視野を示唆するものとして興味深い。

将門の「勅」は『将門記』に引用される形式をとったものではあるが、『将門記』の地の文もまた、いくつかの漢籍を引用しながら書き進められている。その引用回数は、[柳瀬喜代志ほか校注2003] 118ページによれば、帝範9回、史記・漢書各7回、春秋左氏伝5回、文選・白氏文集・孔子各3回、尚書・孝経・淮南子各2回である。ここでは、蚩尤<sup>しゅう</sup>の故事について検討する。

蚩尤とは、伝説上の戦争神で、『書経』によると中国民族の祖とされる古代帝王たる黄帝と戦って敗れた<sup>2</sup>。『将門記』において、将門に勝利した平貞盛・藤原秀郷が将門の害悪を語り合い、<sup>れい</sup>靈蛇<sup>ち</sup>（蛇）や長鯢<sup>ちようけい</sup>を切るように平定すべきだと述べる場面では、『漢書』を典拠として靈蛇とは蚩尤の名であると補足しているが、靈蛇の典拠は明らかではない。激戦ののち、貞盛・秀郷に打ち取られる場面では、新皇（将門）は、矢にあたり「蚩尤の地」に滅び、その頸は「朱雲の人」によって切り取られ

たとえ、『漢書』では朱雲は悪人であると説明する。「蚩尤の地」というのは、蚩尤が黄帝と戦って敗れた伝説と、将門が朝廷から派遣された貞盛・秀郷に敗れた出来事を重ね合わせた表現であろう。朱雲は、さらに尚方の剣を請い、人の首をとったと付け加える。朱雲の履歴については、『漢書』に「朱雲伝」がある。また、「尚方の剣」は、「尚方斬馬剣」として朱雲伝に登場する。将門死後の件では、その終焉の地を版泉（阪泉）と表現する。『漢書』によると、版泉とは高祖の合戦の地であると付けくわえられているが、正しくは『史記』に登場する黄帝の戦場である。この戦いは、黄帝と蚩尤ではなく、黄帝と炎帝の戦闘とみなされているようであるが、ここでは深追いはしない。このように、将門と平貞盛・藤原秀郷らの朝廷軍との戦いを、蚩尤と黄帝との戦いになぞらえているが、『漢書』を典拠とする点には錯誤が多い。

## （２）『沙石集』にみる異国

『沙石集』は、無住道暁により弘安6（1283）年に成立した仏教説話集である。彼の生涯は、[新治村史編纂委員会編1986]にまとめられているが、本稿に直結する限りで添削すると次のとおりである。無住は、嘉禄2（1226）年に生まれ、16歳で常陸に移り住み、18歳で出家、東城寺<sup>3</sup>などで円幸教王房・法身坊などに天台を学んだ。建長4（1252）年、忍性が小田時知に招かれて常陸へ赴いたことを契機として多くの天台寺院が律宗へ変わる中、無住の住房もまた律院となった。この時期の師のひとりである実道坊上人は、土浦市実塚の般若寺の鐘を勧請した源海だといわれている。無住は、このち、東福寺を経て、尾張の長母寺の住持となり、『沙石集』などの著作をまとめ、正和元（1312）年87歳で没した。以上の多くの部分は、『雑談集』巻3愚老述懐（[雨谷昭編修2015] 183-4ページ）を典拠としたようである。

無住の東城寺時代の一コマを伝えたとされる話が、『沙石集』巻5「学生世間の事無沙汰の事」と題する一節に収められている（[雨谷昭編修2015] 182ページ）。該当部分は、ふたつの部分にわかれ、それぞれが真摯な仏教者たる法橋が必ずしも世情に通じていない、もしくは現実的な状況把握力に長けていないことを示唆する内容である。『沙石集』の異国観をみることにしよう。

巻1「慈悲と智とある人を神明も貴び給ふ事」には、のちに高山寺を創建した明恵が、天竺への渡航を断念する件が描かれている。ある時、明恵は解脱房貞慶と春日大社へ参詣したところ、春日野の鹿が膝を折って敬意を示した。明恵は、天竺渡航の志を秘めて故郷の紀伊国湯浅へ戻ったところ、春日大明神は明恵が遠くへ行ってしまうことを嘆いて託宣を下し、明恵は渡航を断念したとされる。以上の記事については、[平野多恵2006]が詳細に分析し、無住が住房を律宗化したことから、当時律宗の拠点であった奈良の西大寺との関わりが生じ、明恵と関わりの深い釈迦像が西大寺にあることから、西大寺を通じた無住・明恵両者の情報交流がありえた可能性を想定する。

明恵が天竺渡航を断念した伝説は、彼の伝記のなかでは著名な一場面であり、たとえば『古今著聞集』巻第2、釈教第2、64「高辨上人例人に非ざる事並びに春日大明神上人の渡天を留め給ふ事」にも同様の物語がある。ここでは春日大社へ参詣したのは明恵のみであり、託宣が下る場面も詳細に描写されている。湯浅へ戻った明恵を、伯母が彼を迎え、それに春日大明神が憑依して託宣を伝えている。その論理は、釈迦は日本へ仏教を伝えるため、春日大明神の姿で現れているにも関わら

ず、この国を捨ててどこへ行こうというのか、というものである。典型的な本地垂迹の思想である。この場面は延慶2（1309）年発願、高階隆兼筆『御物 春日権現験記』巻17において画像化されている。

『沙石集』には、このほかにも多くの異国情報が扱われている。そのすべてを網羅する紙幅は残されていないものの、いくつかを概観しよう。巻一「生類を神明に供ずる不審の事」では、神道と仏教の関係を説明する文脈で、中国における仏教の受容が引き合いに出されている。日本の寺社において、生き物を生贄として献ずる習慣があることを「不審」として、殺生をしないで、般若の法味を捧げることこそ、「神慮」に叶うのだと主張する。「法味」は仏教の趣きを意味する。中国でもかつては、儒教・道教の社会のなか、牛・羊を祖先に手向ける習慣があった。これは菩薩が、仏法はたやすくは広まらなとみて、まずは儒教・道教などの「外典」を広め、父母への孝養の精神を養い、仏教流布の下地としたためだと説明する。日本も中国と同様に、生贄の習慣を脱し、仏教の不殺生の精神へ移行すべきことを示唆する。日本における在来宗教たる神道と仏教の関係を、中国での儒教・道教と仏教の関係になぞらえて説明している点が興味深い。

巻五「和歌の道深き理有る事」では、日本の和歌も、天竺の陀羅尼も世俗の言葉ではあるが、感動や徳を含む点が共通していると述べ、天竺・漢土・和国では言葉を違っても心と同じくしているために、仏教の利益を共有しているのだと説明する。「漢土」の説明を欠くなど、論理の飛躍があるように思えるが、仏教が浸透した3つの地域の共通性を見出そうとする視点が垣間見える。

『将門記』『沙石集』ともに、執筆地は県南地域とはいえないため、これらの情報がどこで筆者に達したのかは明確にはしえない。『将門記』所引の将門の「勅」の原本がかつて存在したとするならば、石井の営所において大陸での王朝交替ならびに『漢書』が把握されていたことになる。

## 2. 中世後期の異国観

### （1）『神皇正統記』にみる異国

『神皇正統記』は、暦応2（1339）年に北畠親房により著された史論書として著名である。北畠親房は、後醍醐天皇に仕え、建武政権樹立後に東国における南朝勢力回復をもくろみ、義良親王とともに伊勢大湊から陸奥へ向かう途中、暴風雨にあって常陸国東条浦へ漂着する。義良親王は伊勢へ押し戻された。親房は小田治久に迎えられて小田城へ入り、『神皇正統記』を執筆することになる。治久は、足利尊氏が常陸の守護に佐竹氏を据えたことなどにより、南朝方となっていた。

『神皇正統記』執筆の目的は、義良親王の訓育であったとも、結城親朝など近隣の北朝勢力にむけて南朝の正統性を主張するためであったともいわれている。ところが親房を招いた治久は、暦応4年には北朝方に降伏する。

天皇の代ごとに書き進められている記述を繙くと、第2代綏靖天皇<sup>4</sup>の項においては、綏靖天皇31（紀元前551）年は、周王朝（東周）の靈王の21年にあたり、この年に孔子が誕生し、儒教を広めたことが紹介されている。その教えは、中国の伝説上の聖王とされる堯および舜、夏王朝の禹王、殷の湯王などが国を治めた道であり、身を正し、家をまとめ、国を治めて、天下を統べることを趣旨

とする。

第26代<sup>5</sup>武寧天皇については、「悪としてなさずと云ふ事なし」と酷評した上、それゆえに仁徳天皇以来の「皇胤」が絶えたとされる。仁徳天皇から武寧天皇までは、仁徳天皇の子、もしくはその子孫により継承されているが、その次の継体天皇以降は、仁徳天皇の弟である若野毛二俣王の系統に切り替わる。『神皇正統記』には「応神五世の御孫」と表現されている。継体天皇については〔山尾幸久1998〕などに詳しいが、ここで古代政治過程史への深入りはしない。この変則的な皇位継承について、子孫に適切な継承者がいない場合、有徳の人物に譲る禪定という行為とともに、帝王に徳が失われた時は滅亡に至る中国の諸事例を、『神皇正統記』は紹介している。堯と舜の子は後継者にふさわしくなく、彼らは禪定をし、舜のあとを夏の初代王の禹に受け継がれたが、桀王に至って、その暴虐のために国を失う。桀王を倒して成立した殷王朝も同様で、初代湯王には徳があったが、最後の紂王は無道であり、やはり滅ぼされてしまう。

天竺においても、阿育王（アショーク王）は、釈迦入滅後100年を経て現れ、即位の日に鉄輪が飛び降り、その威徳で、「閻浮提」を統治したと語る。王法をもって天下を治め、仏理に通じて三宝（仏法僧）を崇めたとし、84000基の仏塔を建てたなど帰依の深さを物語る事績を列挙する。閻浮提とは、仏教の世界観で須弥山の南にあるとされる大陸である。アショークはマウリヤ朝（孔雀王朝）第3代の王で、兄弟を殺害して即位し、インド亜大陸のほぼ全域を統治下に収めたのち、軍事征服策の悲惨さに気づき、非暴力と社会倫理に基づく法の政治に転換し、仏教にも帰依したと伝えられている。しかしながら、ふたたび『神皇正統記』の記述に戻ると、彼の3世の孫である弗沙蜜多羅王は、悪臣の勧めによって仏塔や寺院を破壊し、僧侶を殺害した。阿育王の建てた鵝雀寺の仏歯牙の塔の破壊を目論むに際して、護法神の怒りに触れ、神は大山となって王と軍隊を圧殺した。これにより孔雀王朝は滅亡したのだと天竺の顛末を締めくくる。以上の故事に照らせば、不徳の武寧天皇が仁徳天皇以来の系統を維持できず、継体天皇により受け継がれる結果となった経緯を「先祖大なる徳有りとも、不徳の子孫、宗廟の祭をたゝん事疑ひなし」と説き、その必然性を強調している。

第48代称徳天皇（在位764～770）は、第46代孝謙天皇が再び天皇位に復した（重祚）際の諡号である。出家し、かつ女性が皇位についた点が、やや遡る時期の唐における則天武后（在位690～705）になぞらえられている。則天武后は、当初太宗の女御であったが、その崩御ののちに出家し、感業寺にいたところを高宗に見初められて皇后となる。このことについて諫言をする者も多かったが用いられることはなかった。高宗は崩御し、武后は子である中宗および睿宗を皇位につけ、そののち自ら皇位に就き、国号を唐から大周に改めた。さらには、一度は皇位につけた中宗・睿宗を臣下たる諸王に下し、自らの一族たる武氏、僧侶や宦官を重用したことに対し、世間の批判も多かったと結論づけ、とりわけ僧侶の登用については、日本で道鏡を重用した称徳天皇の人事への疑問に結びつく。恵琳など、中国の歴代王朝において僧侶にして政治の実権をもつ、あるいは任官した故事を列挙した上で、則天武后と称徳天皇の話題に立ち返って「両国の事相似たり」と総括し、聖武天皇の系統は「この女帝にて絶え給ひぬ」と論断する。

第52代嵯峨天皇の項には、伝教大師最澄および弘法大師空海が唐へ渡航し、仏教の修行をし、帰国する様子が見える。最澄は、現在の浙江省東部にある天台山へ赴き道邃<sup>どうずい</sup>に師事し、奥義をことごと

とく伝承された。同山には智者大師以来、鍵が失われて開けることができない蔵があり、最澄がころみに別の鍵を用いて滞らずに開けたことから、全山から敬われるにいたったことが伝えられている。慈覚大師円仁・智証大師円珍もまた入唐し、天台・真言を究め、日本へ弘めたことで、その流れは一層盛んとなった。

その後、唐は乱れ、多くの経典が失われる中、道邃から4代下った義寂の時代には、観心（自らの内心を観察すること）の教えのみが伝えられ、教義の究明がおこなわれなくなってしまった。このころの唐では、武宗（在位840～846）の時代に会昌の廃仏として著名な仏教弾圧策が取られることがあった。「唐の乱れ」というのは、そうした状況を踏まえたのであろう。最澄と空海の入唐はともにそれ以前の延暦23(804)年である。

呉越国の忠懿王<sup>ちゅうい</sup>は、天台宗の衰退を嘆き、使者10名を日本へ派遣し、経典を求め、使者は写経し持ち帰った。呉越は、五代の時代（907～78）に現在の浙江省一帯を支配した政権であり、日本との関係については〔西岡虎之助1984〕にまとめられている。これは朱雀天皇の時代のことであり、日本から中国へ経典が持ち帰られたことを、「（日本は・伊川補）この国（唐）の天台宗に、かへりて本となれるなり」と位置づける。唐において仏教が衰退し、むしろ日本において興隆しているとする見方は、日本の「三国」世界観のひとつの潮流を形成しており、たとえば、永観二(984)年に成立した源為憲『三宝絵』では「会昌よりのち一百四十余年に及びぬれば、大唐をおしはかるに法文の跡すくなくや成りぬらむ。あなたうと、仏法東にながれてさかりに我が国にとどまり、」などと述べられている（〔前田雅之2008〕127ページ）。朱雀天皇の時代に呉越から使者が来日したことは、承平5(935)年9月に「大唐呉越州人」蔣丕勳が羊数頭を献じたことが『日本紀略』にみえ、以後同6年、天慶元年にも来日しているものの、写経の点については未詳とせざるをえない。〔西岡虎之助1984〕207ページ以下では、むしろ日本に対する呉越仏教の影響が論じられている。

他方、空海は、宝亀5(774)年6月15日に生まれたと伝える。この日は、不空三蔵（不空金剛）の命日であり、それゆえに空海は彼の後身とされた。不空三蔵は、開元8(720)年に洛陽へ来たインド人僧で、のちにセイロンで密教経典の収集をし、ふたたび長安へ戻る。その不空の弟子である恵果に、空海は師事することになる。ふたたび『神皇正統記』の記述に戻ると、恵果は空海へ「われと汝と久しき契約あり、誓ひて蜜蔵を弘めむ」と告げたとされる。また、様々な神異を起こしたことで、順宗（在位805～6年）の信任をも得た。恵果の弟子は、剣南の惟上、河北の義圓、新羅の恵日、訶陵の辨弘、青龍の義明、そして空海の6名であり、その意味で空海は真言宗の正統であると述べる。先述の経典蓄積の話題と同様、日本の仏教を中国のそれに勝る正統な潮流であるとする姿勢がみてとれる。

## （2）法雲寺史料にみる異国

『神皇正統記』と同時期の海外情報として見落とすことができないのは、法雲寺に残る史料群である。法雲寺は、現在の土浦市高岡にある臨済宗寺院で、その寺領・塔頭・文化財などの概略は〔新治村史編纂委員会編1986〕82～92ページにまとめられ、「法雲寺文書」は〔茨城県史編さん中世史部会編1970〕406～417ページに翻刻されている。法雲寺の前身は、楊阜庵<sup>ようふあん</sup>といい、前項で北畠親房

を招いた小田治久が、正慶元(1330)年に建立した。建武2(1335)年 <sup>ちゅうほうみょうほん</sup>中峰明本の十三回忌に正受庵と改称、さらに文和3(1354)年に足利尊氏の命をうけた治久の助成で堂宇が営まれ、寺号も大雄山法雲寺と改められた。

法雲寺の開山は中峰明本であるが、その創建を実質的に支えたのは二世の復庵宗己<sup>ふくあんそうき</sup>である。彼の履歴については、[新治村史編纂委員会編1986] 80-81ページにおいて概観でき、とりわけ入元して以降については[西尾賢隆1999] 71-2ページに詳しい。また、関係史料の原典は[東京大学史料編纂所編1973] 10-48ページにまとめられている。先述「法雲寺文書」の一部は後者にも収められている。

復庵宗己は、弘安3(1280)年、小田宗知と宮宅源五国経の娘小夜との間に生まれたといわれ、のちに小田治久の猶子となる。治久が建てた楊阜庵に入ったのは、この事情によると思われる。法雲寺には治久の肖像画が伝来するが、それもこうした縁によるのであろう。松島円福寺の空巖恵のもとで出家し、そののち遍歴し、文保2(1318)年に入元する。入元の年について西尾賢隆氏は、静嘉堂文庫蔵『大光禪師語録』所収「勅諭大光禪師復庵和尚行状」では延慶3(1310)年とあるものの、同じ文書に中峰明本に師事した歳月が6年と記されていることと矛盾をきたすため、同行者の記録における渡航年である文保2年を、復庵入元の年とする見解を示している。[東京大学史料編纂所編1973] 11ページの同「行状」では、年譜では延慶3年、扶桑高僧伝では文保2年とあるとの註を施した上で、文保元年の渡航としている。

渡航後は天目山にいた中峰明本のもとへ参じ、中峰に従って各地を周旋し、師事すること6年、さらに中峰の没後は法雲塔に仕えること6年にして帰国し、先述の楊阜庵に入る。復庵の帰国時にはすでに他界している中峰が、のちに法雲寺の開山とされる所以である。帰国の年は、[西尾賢隆1999] 71ページでは1329年とあるが、『開山大光禪師語録』によると元徳2(1330)年帰国、正慶元(1332)年楊阜庵入寺とある。管見の限り、原典で帰国の年を明示したものは、この1点のみであるが、彼の元滞期間を「前後一紀」と表現したものも散見する。そののち、貞和2(1346)年に恵侍者を入元させ、<sup>ほうひん</sup>法兄の蘇州幻住庵住持・玉庭珂月および杭州天目法雲塔院塔主・<sup>たつす</sup>善栄へ書簡を届けている。そして、延文3(1358)年9月、79歳の生涯を閉じた。

彼の入元時の記録は、中峰との禅問答を内容とするが、帰国後の書簡のなかに復庵自身の滞在に関する言葉を見出すことができる。『開山大光禪師語録』には、玉庭珂月へ宛てられた丙戌(1346)正月16日付啓割(書簡)が収められている([東京大学史料編纂所編1973] 21-2ページ)。日元で異なる元号を使用しているため、干支で年次を表現することはしばしばおこなわれる。そこには、元滞在中の思いならびに玉庭を訪れることがなかった後悔が吐露されている。かつて海を越えて直ちに天目山に参じ、大和尚(中峰)を礼拝し、誨言や覚りなどを示していただいた。文中に登場する「師岩」というのは、にわかには文意を取りにくいものの、西天目山の師子巖([西尾賢隆1999] 66ページ参照)のことではなかろうか。残余のことを顧みずに、黙々と(中峰に)参じていたために、他を訪れることはせず、それゆえに玉庭の蘇州幻住庵を訪れて面会することもなく、物足りなさを感じていた。中峰の没後に故郷へ帰った、と述懐する。

これに対する玉庭珂月の返書は「法雲寺文書」8号([茨城県史編さん中世史部会編1970] 408ペ



ージ）に収められているとともに、『開山大光禅師語録』（〔東京大学史料編纂所編1973〕23-4ページ）にも引用されている。己丑(1349)12月24日付である。ここには、玉庭が庵を結んでからすでに40年以上が経過したなどと述べたのちに、恵侍者が丁亥(1347)12月24日に玉庭のもとへ到着し、先述の書簡を渡したことが記されている。中峰の法を嗣ぎ、その法を東方へ伝えたことについて敬意を表明するとともに、恵侍者を留め置いて2年間の修行をさせたと伝えている。

他方、善栄に対する復庵の書簡は管見の限り未詳であるが、善栄からの返書は「法雲寺文書」9号（〔茨城県史編さん中世史部会編1970〕408ページ）および『開山大光禅師語録』（〔東京大学史料編纂所編1973〕22-3ページ）に掲載されている。これによれば、延祐年間（1314～21）に、天目山へ戻った中峰のもとで相まみえつつも、それから20余年会うことがなかった。いま波濤の險しきを超え、恵侍者が到り、「丙戌解制日」付の書簡が届いたとある。先述の玉庭の返書にも復庵の書簡が「丙戌歳解制日」付であったことが記されている。「丙戌」は復庵の書簡にも記されており、西暦1346年に当たる。「解制日」の語意は俄かには判然としないが、玉庭宛の復庵書簡には正月16日と書かれており、この日を意味するのであろう。復庵は丙戌(1346)正月16日に玉庭・善栄の両者への書簡を準備したことがわかる。善栄は、復庵の書簡に接し、臨済仏法の一流が遠国へ伝播した感激を述べ、中峰の法衣一頂と頂相（肖像画）一軸を送ることを記している。現在も法雲寺に伝わる、国指定重要文化財「中峰和尚像」（〔新治村史編纂委員会編1986〕口絵）がそれであると考えられる。

復庵は、元滞在中に、中峰から「狗子無仏性」の公案を授けられたといわれている（〔東京大学史料編纂所編1973〕13ページ）。公案とは、参じた者に考える手がかりを与える問いや言葉のことである。「狗子無仏性」は、もともと『無門関』に「趙州狗子」として掲載されており、犬には仏性（仏になる性質）があるか、という問いで、その答えは「なし」とされる（〔新治村史編纂委員会編1986〕81ページ）。一見無理からぬ問答ながら、じつは一切衆生（すべての生き物）に仏性があるとする大乘仏教の根本と矛盾するかの内容を含む。この点を踏まえて、どのように理解するかが復庵に与えられた課題であるが、本稿ではこれ以上の深追いは慎むことにしたい。

本章で検討したふたつの史料は、ともに県南地域で書かれたことが明確なもので、これらの情報が当該地域にもたらされたとみなすことができる。『神皇正統記』は後世にまで大きな影響を与え、復庵は足利尊氏に上洛を請われるなど、ともに同時代に注目を集めた事例といえることができる。

### 3. 近世の異国観

#### （1）間宮林蔵関係史料にみる異国

近世に入ると、以上の異国観の枠組みを超えた知識が付加されるようになる。間宮林蔵は名を<sup>ともむね</sup>倫宗といい、林蔵は通称である。筑波郡上平柳村（現在のつくばみらい市上平柳）に生まれ、生家は現存し茨城県指定史跡となっている。彼の前半生は『新編常陸国誌』巻十「人物」の項に「間宮倫宗」としてまとめられている。妹尾萬壽吉ならびに飯島省三郎の筆記にもとづく内容を繙くと、幼少の頃、普請掛の役人が算盤を片手に工事の計画をしているのを見て笑い、暗算をしてみせたなどと算術に秀でた面をみせた逸話を伝えている。その後、20才にして普請役下として幕府へ出仕す

ことになる。蝦夷地を訪れた際、ロシア船の来襲に危機感を覚え、文化3(1806)年に最初は松田傳十郎とともに樺太探検をするが途中にて引き返し、同年秋に単独で樺太北端および対岸(現在のロシア沿海州)を探検した。『東韃地方紀行』は、その探検を村上貞助が聴取してまとめたものである。このうち樺太に関する内容は、『北夷分界余話』に収められている。この点は後者の凡例に「凡此島(樺太・伊川補)に属する処の事は、奥地異俗夷の事といへども皆此篇中に編み、他満洲に属するの事は別に紀行(『東韃地方紀行』のこと)編て悉く是をしるす。」とある点に明記されている。『東韃地方紀行』は上中下巻からなり、上巻は黒竜江岸デレンにある清の「満州仮府」への往路、中巻は仮府での滞在、下巻は復路について記述している。行程については、図1〔洞富雄ほか編注1988〕2ページを参照。

上巻によれば、間宮林蔵は文化5年7月10日に宗谷を出帆し、同日中に樺太南端のシラヌシへ到着している。その後、トンナイを経て、8月15日に中部西海岸のリヨナイへたどりつく。ここへは大陸側の黒竜江下流域に住む「山旦夷」船6艘数十名が滞在中で、林蔵がトンナイから連れていた「従夷」へ、言葉が通じないままに暴言を吐いたため、従夷たちは探検を継続する気力を喪失した。林蔵が酒などを与えて慰めた結果、探検を継続することになり、東海岸のトツソへ往復し、リヨナイへ戻り、酋長ウトニンの助力によりしばらく同地へ滞在し、11月26日にトンナイへ戻る。翌年2月2日ウショロへ至る。ウショロはリヨナイよりも南であるが、ここから先は「満洲附属の夷域」とされ、それ以南の「初島」と区別している。トンナイから同行してきた従夷たちも、ここから先へ進むことに同意をしなかったため、勇敢な1名を除いてトンナイへ返し、新たに5名を雇って旅をつづける。4月9日にはノテトへ着くが、海が氷結していたのと、ウショロで雇用した人々が先へ進むことをためらったため5月7日まで同地へ滞在した。樺太における交通範囲を想像させる情報として興味深い。ノテトからナニヤーまでの間は「島と東韃地の相対せる迫処」と表現され、その間に南への潮流があると述べる。のちに「間宮海峡」とよばれる海域である。ナニヤーは、樺太島の北端に近い地点で、林蔵はそこから東海岸へ出る計画であったが、同行者の同意が得られずに、ノテトへ引き返し、そこでトンナイからの同行者を除いて全員をウショロへ返した。ノテトの酋長コーニから、同地がロシアや東韃へ近いことを聞き、林蔵たちはコーニが船がデレンにある清の満州仮府へ朝貢をする機会に、彼の船で海峡を渡り、7月2日東韃のトマル岬を確認し、ロロカマチーなる港へ停泊した。さらにトゥウシボーで船を引き揚げ、キジ湖を経て7日にはキチーへ至り、そこからはマンコー川（黒竜江）を遡る。キチーにもかつて満州仮府がおかれていたが、交易による紛争を

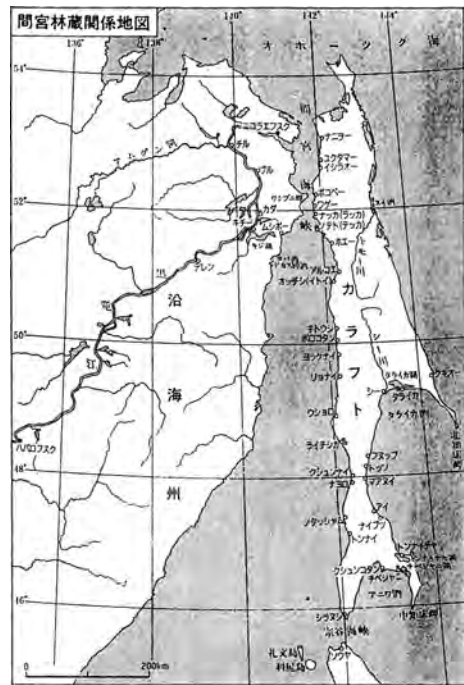


図 1 間宮林蔵探検路

生じた結果廃された。11日にはデレンへ到着し、上巻が終わる。中巻はデレンにおける進貢や通商に関する本稿との関わりにおいて興味深い内容を含んでいるが、もはや詳論する紙幅は残されていない。

## （２）山村才助関係史料にみる異国

山村才助は蘭学者・地理学者として著名な人物で、亀城公園（土浦城址）には曾孫山村慶二が大正9（1920）年に建立した「贈位紀恩之碑」がある。才助は通称であり、名は昌永といった。土浦藩士山村昌茂の長男として明和7（1770）年に生まれる。大槻玄沢の芝蘭堂に入門し、その四天王のひとりといわれた。寛政12（1800）年父の隠居により家督を相続する。後に詳述する『訂正増訳采覧異言』を含む著作の多くは、こののちにまとめられたものである。文化4（1807）年に他界した。

彼は、その長いとはいえない生涯のなかで、『訂正増訳采覧異言』のほかにも『坤輿万国全図』『華夷一覽図』といった地図をはじめ、ドイツの地理学者ヨハン・ヒブネル（Johan Hubner）『ゼオガラヒー』を参照した『亜細亜諸島志』『印度志』、幕府の命によりまとめられた『露西亞国志』などのほか、西川如見が諸国の風俗を人物図とともに紹介した『四十二国人物図説』を訂正増補し『訂正四十二国人物図説』を完成させてもいる。ヒブネルの著作は、『訂正増訳采覧異言』執筆に際しても参照され、その書名は『万国伝信紀事』と記されている。

それらの中で、彼の代表作として著名なのが、『訂正増訳采覧異言』である。国立公文書館内閣文庫本の影印は〔山村才助1979〕として刊行されている。書名が端的に物語っているように、ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッチ（Giovanni Battista Sidotti）の情報により新井白石が正徳3（1713）年にまとめた『采覧異言』を訂正・増補したものである。訂正・増補の結果、『采覧異言』の約10倍の分量となっているため、実質的には独自の世界地理書と位置づけるべき内容である。訂正・増補の作業に際して用いられた書物の名は、首巻「訂正増訳采覧異言引用書目」にまとめられている。西洋・漢土・本朝に区分され、西洋32冊（異本などを含む）、漢土41冊、本朝53冊の文献を参照したことが明示される。先述の『万国伝信紀事』の名もこの中にみえる。『訂正増訳采覧異言』は、享和2（1802）年に成立し、二年後に柴野栗山を通じて幕府へ進呈された。

全体構成は、首巻に凡例・書目・目録（目次）などのほか、地球図・半球図、<sup>ヨーロッパ</sup>洲輿地図、<sup>アフリカ</sup>洲輿地図、<sup>アメリカ</sup>洲輿地図、<sup>南アメリカ</sup>洲輿地図、<sup>北アメリカ</sup>洲輿地図の各地図（〔山村才助1979〕上85-121ページ）が含まれる。ヨーロッパの地図が冒頭であり、かつ詳細なのは、白石以来の情報がヨーロッパ情報の枠組みにもとづいているためである。そうした知的体系のなか、長らく明確ではなかったオセアニアの地理情報は、『訂正増訳采覧異言』に掲載されていることは、日本におけるオセアニア情報の先駆とされる（〔石川榮吉2006〕71ページ）。<sup>ニュージーランド</sup>洲輿地図には、<sup>ティモール</sup>「地木尔」のほか「新和蘭（オーストラリア）」の現在バン・ディーメン（Van Diemen）湾と呼ばれている一帯を思わせる地形が、地名とともに表記されている。巻之一以下から具体的な記述がはじまる。その内容は次の表のとおりであるが、巻之1～4はヨーロッパ、5～6はアフリカ、7～10はオセアニアを含むアジア、11～12は南北アメリカという構成である。本稿において、この膨大な情報を逐一検討することはできないが、諸地域について少しくみることにしたい。

巻	首巻目録による内容
1	(カトリックの中心イタリアとローマ) 欧羅巴総説、 <sup>イタリヤ</sup> 意太利亜、 <sup>ローマ</sup> 邏馬
2	(ドイツ以东以北を中心とした地域) <sup>ドイツ</sup> 入尔馬泥亜、 <sup>デンマーク</sup> 弟那瑪尔加、 <sup>プランドンブルク</sup> 蒲郎甸勃尔孤、 <sup>フィンランド</sup> 肥良的亜、 <sup>ポーランド</sup> 波羅泥亜、 <sup>(ポドラシア)</sup> 波多里亜、 <sup>リトアニア</sup> 礼勿泥亜、 <sup>(リホニア)</sup> 蘇亦齊、 <sup>(シュエシア)</sup> 諾尔勿义亜、 <sup>ロシア</sup> 莫斯科未亜、 <sup>(サキソニア)</sup> 沙瑣泥亜、 <sup>シチリア</sup> 西齊里亜
3	(イベリア半島およびフランス) <sup>スペイン</sup> 伊斯把你亜、 <sup>ポルトガル</sup> 波尔杜瓦尔、 <sup>アンダルシア</sup> 俺大魯西亜、 <sup>グラナダ</sup> 瓦辣那達、 <sup>カステイリヤ</sup> 加西蠟、 <sup>ナバラ</sup> 那勿蠟、 <sup>フランス</sup> 拂郎察
4	(巻之2および3の間にあるヨーロッパ諸国など) <sup>オランダ</sup> 嗚蘭地、 <sup>イングランド</sup> 漢义利亜、 <sup>スコットランド</sup> 思可齊亜、 <sup>(イベリア)</sup> 喜百泥亜、 <sup>グリーンランド</sup> 臥兒狼德、 <sup>(ヘルヘシア)</sup> 赫尔勿婁亜、 <sup>ボヘミア</sup> 博厄美亜、 <sup>(ロッテリンジア)</sup> 羅得林日亜、 <sup>(オングリア)</sup> 翁加里亜、 <sup>ギリシヤ</sup> 厄勒祭亜、 <sup>アイスランド</sup> 依蘭地
5	(トルコおよびアフリカ南部) 亜弗利加洲総説、 <sup>トルコ</sup> 都児格、 <sup>イタリヤ</sup> 曷叭布刺、 <sup>マダガスカル</sup> 麻打葛失曷尔
6	(アフリカ補遺) 補訳亜弗利加諸国、 <sup>(バルバリア)</sup> 巴尔巴里亜、 <sup>(ビレトルグリット)</sup> 皮力土尔熱利土、 <sup>西サハラ</sup> 沙拉野、 <sup>(ニギリント)</sup> 泥义利西亜、 <sup>エチオピア</sup> 黒地兀皮亜、 <sup>エチオピア</sup> 亜弗利加諸島
7	(西および南アジア) 亜細亞洲総説、 <sup>アラビア</sup> 亜刺比亜、 <sup>ホルムズ</sup> 忽魯謨斯、 <sup>ペルシヤ</sup> 巴尔齊亜、 <sup>(モゴル)</sup> 莫臥兒、 <sup>インド</sup> 應帝亜
8	(インドからインドシナ半島) <sup>マラバール</sup> 麻辣襍尔、 <sup>ゴア</sup> 臥亜、 <sup>コチ</sup> 各正、 <sup>スリランカ</sup> 齊狼、 <sup>(ナガバタン)</sup> 沙里八丹、 <sup>(カシュリバタン)</sup> 加寧八丹、 <sup>(オリッサ)</sup> 烏里舍、 <sup>(アラカン)</sup> 亜刺敢、 <sup>ベンガル</sup> 榜葛刺、 <sup>ベグー</sup> 毘牛、 <sup>シャム</sup> 暹羅
9	(マラッカ、東南アジア島嶼地域およびオセアニア) <sup>マラッカ</sup> 満刺加、 <sup>スマトラ</sup> 沙馬太刺、 <sup>ボルネオ</sup> 波耳匿何、 <sup>ジャワ</sup> 瓜哇、 <sup>スラウェシ</sup> 食力百弘、 <sup>モルッカ</sup> 馬路古、 <sup>(マッラドヤノハ)</sup> 新和蘭地
10	(フィリピンおよび東アジア) <sup>ルソン</sup> 呂宋、 <sup>マカオ</sup> 支那、 <sup>(イスレデブラッセル)</sup> 阿馬港、 <sup>モリ</sup> 萬里石塘、 <sup>日本</sup> 野作、 <sup>モンゴル</sup> 韃靼
11	(メキシコを除く中南米) 亜墨利加洲総説、 <sup>ブラジル</sup> 南亜墨利加、 <sup>パタゴニア</sup> 伯西兒、 <sup>(シイリイ)</sup> 巴大温、 <sup>ペルー</sup> 智里、 <sup>(カロワコス)</sup> 李露、 <sup>(ゴウドカステラ)</sup> 加羅哇哥斯、 <sup>(ボバヤナ)</sup> 金加西蠟、 <sup>ニカラガ</sup> 坡巴牙那、 <sup>ホンジュラス</sup> 尼加辣雅、 <sup>ユカタン</sup> 豊度蠟、 <sup>グアテマラ</sup> 字草堂、 <sup>アマサン</sup> 哇的麻刺、 <sup>パラグアイ</sup> 亜馬鑽、 <sup>巴拉グアイ</sup> 把刺寡乙
12	(メキシコおよびメキシコ湾岸を中心とした北米およびカリブ海地域) 北亜墨利加、 <sup>(ノバガラナダ)</sup> 新瓦刺察達、 <sup>(ニウソイデワッレス)</sup> 新南哇列斯、 <sup>(ニウノワルドワッレス)</sup> 新北哇列斯、 <sup>ケベック</sup> 新拂郎察、 <sup>(モンロンベルグ)</sup> 諾龍伯耳尾、 <sup>(モホッコス)</sup> 莫可沙、 <sup>(アバカル)</sup> 亜八加尔、 <sup>(アバルカン)</sup> 亜伯耳耕、 <sup>フロリダ</sup> 花地、 <sup>キューバ</sup> 古巴、 <sup>イスパニョーラ</sup> 小伊西把尼亜、 <sup>カリフォルニア</sup> 角利勿尔尼亜

ヨーロッパの総説は、地域の範囲から説き起こされる。坤輿万国図を根拠として、南は地中海、北は「臥蘭的亜」および氷海、東は「大乃河」「墨何的湖」「太海」、西は大西洋に至る地域だと規定する（[山村才助1979] 上129-30ページ）。地中海と大西洋は現在も使用されている地名であるが、「臥蘭的亜」は、才助（昌永）の註では、「グルウンランド」とあるため、巻之四における漢字表記（上表参照）とは異なるものの、グリーンランドに比定できる。東の境界として記される三つの地名のうち「太海」は首巻の地図の位置と照合すると黒海と確定できる。「墨何的湖」はそれに近接する

アゾフ海である。「大乃河」については後述する。興味深いのはこの範囲よりも、むしろこの根拠となる地図の解説である。

新井白石の執筆部分には、上記「図説」は「明人ノ刻む所、萬国坤輿図説なり（原漢文）」とあり、坤輿万国図は華人により作成されたと説明されている（〔山村才助1979〕上129ページ）。ところが、才助の註をみると「図説ハコレ利瑪竇ガ説ナリ」とあり、イタリア人宣教師マテオ・リッチ（Matteo Ricci）の著作であると訂正されている。現在土浦市立博物館に所蔵される坤輿万国図は、才助による筆写と伝えられる<sup>7</sup>が、白石の時代から約90年を経た情報の深化を示している。土浦市立博物館蔵の地図を詳細に検討する機会には、いまだ巡り会っていないが、才助が参照した地図は、明の天啓年間（1621～8）に印刷されたものとされる（〔山村才助1979〕上130ページ）。

ヨーロッパ各論の項目について詳述する余地はすでに残されていないが、該当部分はイタリアとローマから説き起こされる。『訂正増訳采覧異言』自体はヨーロッパ文献の多くをオランダ語の出版物に依存しているものの、その下敷きたる『采覧異言』は、イタリア人宣教師シドッチの情報に基づくためである。ポルトガルの項目には、白石の記述部分に、天文10(1541)年7月に豊後の神宮寺浦へ280人を乗せた一隻の船が到着したことが記されている。これは明の茅元儀が言うところの「佛来积古（フランシスコ）」が豊後へ鳥銃を伝えたとする出来事であり、天文12年には6隻のうち1隻が種子島へ寄港したと補足する。典拠はいくつかにまたがり、天文12年の件は不完全ながら文之玄昌<sup>ぶんしげんしょう</sup>「鉄炮記」を、茅元儀の件は『武備志』を、神宮寺浦での280名に関する件については出典情報を欠くものの、『歴代鎮西要略』巻6および『豊薩軍記』巻1には、天文10年7月27日の出来事として280人の来航を記しているため、この系統の情報に依拠したことは疑いない（〔伊川健二2009〕14ページ、〔伊川健二2013〕31ページ）。

アフリカ各論の冒頭では、その地域呼称が「リベア<sup>リビア</sup>」ともいわれることから、この二者の関係を考察している。才助は、巻之五の冒頭（〔山村才助1979〕上577ページ）において、ラテン語でもオランダ語でもリビアではなく「アフリカ」と呼ばれ、フランス語では「アフリケ」である旨を確認している。議論はさらに展開し、『万国伝信紀事』にはリビアはアフリカの「古ノ大国（〔山村才助1979〕上581ページ）」であり、エジプトの近くであると紹介している。ヨーロッパ文献は当該地域名をアフリカといい、リビアと記すものはないとも付け加える。北島見信『紅毛天地二図贅説』は、かつてリビアと言っていたものを、オランダの地図がアフリカに改めたと記していると補足する。才助は、最終的な解答にたどりついてはいないものの、現代ではよく知られているように、ヘロドトス『歴史』をひもとけば、エジプト王ネコスがフェニキア人の船団に命じて、紅海から南を目指し、「リビア」を航海させ、同地域はアジアを接する部分を除いて四方を海で囲まれていることを証明したという記事（〔ヘロドトス1972〕28－30ページ）がある。アフリカ大陸全域を指してリビアと称する用例は、かつては確実に存在した。

アジア地域については、アジアとヨーロッパの境界に関する議論が展開する。白石の記載部分では、坤輿万国図によれば両者の境界は「大乃河」「墨何的湖」「太海」とする説明を紹介する（〔山村才助1979〕下717ページ）。これはヨーロッパの各論部分でも、これらの地域がヨーロッパの東端だとされているのと符合する。しかしながら、白石は、ヨーロッパ東部といわれる、瓦<sup>（ラブドラ）</sup>鰐<sup>（コンドラ）</sup>耶、公多辣、

(ホルカリヤ) (ナカヤ) (アストラハン)  
 莫尔加耳泥亜, 南幹牙, 亜私大臘甘などの「国」は, 「大乃河」の東であるため, この川をヨーロッパとアジアの境界とする理解に矛盾があると指摘する ([山村才助1979] 下719ページ)。才助は, これらの内容に注釈をほどこし, 「大乃」に「タナイス」とフリガナを施した。タナイスの地名と首巻の地図を照合することで, 「大乃川」はアゾフで黒海へそそぐドン川だと確定できる。タナイスは, アゾフに存在した古代ギリシャの植民市の名である。「墨何的湖」「太海」は, 先述のとおり, アゾフ海および黒海である。

白石がヨーロッパ東端として指摘した5つの地名について, 才助は次のように注釈を施している。「瓦翳耶」をヲブドラに比定する白石の理解を否定し, ヲブドラはオビ川とペトソラ (ベチョラか) の間の地域だと訂正する。オビ川東岸にオブドリヤという地域があり ([大橋興一1974] 77ページ), 少なくとも才助は, この地域に比定したものと思われる。また, コンドラは, 「コンヂンスケイ」ともいい, <sup>ロシア (リュスランド)</sup> 東魯西亜の一部だと補足する。東魯西亜は, リトアニアやポーランドなど西ロシアに対する地域呼称であろう。地図をみると (図2 [山村才助1979] 上92ページ, 北緯70度, 東経65度付近), ベチョラ川河口付近に「公多辣」の地名が書き込まれている。この地域はロシア帝国の時代にはアルハンゲリスク県に属し, 交易拠点としてはプストゼルスク周辺だと考えられる。ホルカリヤ (ボルカルニア) は, 「ボルガル」「ボルガリア」ともいい, <sup>(ヴォルガ)</sup> 窩尔加河, <sup>(カザン)</sup> 加山, <sup>(アストラハン)</sup> 亜私大臘甘の間にあり, かつては一種の王国であったとされる。地図をみると, カスピ海 (北高海) の北に「莫尔加耳 (ボルガル)」という地名が書き込まれている。カザン付近に勢力を築いていたブルガル人のことではないだろうか ([植田樹2000] 21ページ地図)。カザンには『訂正増訳采覧異言』と同時期の1804年に大学が置かれ, 東洋人文学講座が設けられ, ロシアにおける東洋学の拠点となる ([ファン＝デル＝オイエ2013] 123ページ)。アストラハン<sup>(アストラハン)</sup>は, ヴォルガ河口付近の町である。ナカヤは, 「ナカイセ・タルタリイ」ともいわれ, ヴォルガ川の東, アストラハンと黒海に接していると説明される。[山村才助1979] 上98ページの地図において, ドン川 (大乃河) 河口付近に「南幹牙」と書かれている。

才助の比定のとおりだとすれば, 白石が列举した5つの地名のうち, <sup>(ホルカリヤ)</sup> 莫尔加耳泥亜, <sup>(ナカヤ)</sup> 南幹牙, <sup>(アストラハン)</sup> 亜私大臘甘の3つはドン川東岸からカスピ海にかけての地域であり, 瓦翳耶, 公多辣は北極海 (カラ海・バレンツ海) に面した地域だということになる。これらの地域の共通点としては, モスクワ大公国時代とりわけイワン4世時代に大公国版図に加えられた地域という点を指摘できる。ロシアの地域情報が, この時代の内容に依拠しているこ



図2 カフカズ地方周辺図

とは、ロシアがムスコヒアと呼ばれていることと符合する。ドン川周辺地域については卷之十（〔山村才助1979〕下1082-4ページ）で、ロシア帝国西部の「大部」として詳述されている。北極海周辺地域は経度でいえば、ドン川河口よりは東にあたり、白石の論旨には抵触しない。かりに、ドン川河口地域またはそれよりやや東へ移動し、カスピ海西岸へ至る3地域とペチョラ川周辺の両地域を南北に結んだ線を当時のアジアとヨーロッパの境界だとみなしうるならば、ロシアをウラル山脈で二分する現在の認識よりも西に線が引かれていたことになる。

『訂正増訳采覧異言』におけるアジア情報は、オセアニアの一部をも含む詳細なものである反面、朝鮮半島地域が立項されていない。卷之十「支那」において万里の長城について説明した文脈のなかで、長城東端の先に「朝鮮国」があり、ヨーロッパでは「コラレア」と呼ばれ、国全体を八地域に分けていることなどが紹介されている（〔山村才助1979〕下1018ページ）に過ぎない点は、奇異とするほかはない。

南アメリカ地域の範囲は、「マルデルノル（北海）」を北限としている（〔山村才助1979〕下1090-1ページ）が、曖昧である。パナマ地峡を南北アメリカの境界とする説も紹介されている（〔山村才助1979〕下1096ページ）が、卷之十一に含まれる地域名によれば、ユカタン半島以外のメキシコを含まず、かつグアテマラ以南の中南米地域といえそうである。1497年にフィレンツェ人アメリゴ・ヴェスプッチ（Amerigo Vespucci）が到達し、それによりアメリカと名付けられたことなどが解説されている。北アメリカ地域については、首巻の目録では欠落しているが、「イスパニヤノヲハ」すなわちメキシコから説き起こされている（〔山村才助1979〕下1172ページ）。慶長15(1610)年にフィリピン臨時総督の任を終え、メキシコへ帰還する途中に、岩和田（現在の千葉県御宿町）へ漂着したロドリゴ・デ・ビベロ（Rodrigo de Vivero、ただし原文には「商舶」とのみ記載）を救助して以来、しばらく日墨間の交渉が継続するが、その点についても簡単に紹介されている（〔山村才助1979〕下1174-5ページ）。

最澄にはじまる仏教東漸の世界観として、世界を天竺・漢土・本朝の三つに分割するいわゆる三国観の発想があり、本稿の素材のなかでは『沙石集』や『神皇正統記』がその枠組みであるといえる。『将門記』と『東韃地方紀行』は、その枠外である日本海を隔てた現在のロシア沿海州から中国東北部を意識した内容を含む点が特徴として共通する。近世のヨーロッパ地理情報流入のなか、山村才助は、それらとは根本的に異なる世界を各書照合のもとに描きだしている<sup>8</sup>。しかしながら、その情報源に着目するならば、別の変遷がみえてはこないだろうか。三国観のうち天竺に関しては、たとえば天竺・震旦・本朝の三部構成である『今昔物語集』のうち、卷5冒頭の話が『大唐西域記』を下敷きにしていることが示すように、三国観における天竺情報は中国からの情報に依拠している。その点では三国観は二元的視覚で構成されている。これに対して、『訂正増訳采覧異言』は、ほぼ全世界を網羅した地理書ということができるが、その情報源は「引用書目」にあるとおり、西洋・漢土・本朝である。このうち「西洋」にはオランダ、フランス、ロシア、ドイツ（ゼルマニア、プロイセン）が含まれているが、基本的には三元的視覚と総括してよいように思われる。この分類のほかに、『法雲寺文書』と『東韃地方紀行』は、伝聞による情報ではなく、実地へ赴いた経験による点で、他の記述と一線を画している。

## おわりに

本稿は、本学における「共通科目 日本史」の授業準備に際して収集・整理した情報を基礎として、「前近代異国観」に直結する内容に限定し、さらに学術情報として遜色のない程度に掘り下げたものである。

本稿において紹介した諸事例のほか、たとえば『養蚕秘録』上巻「天竺霖異大王の事」に登場する金色姫伝説（〔志田諄一1997〕56－9ページ）や沼尻墨僊による大輿地球儀などは、異国観を考察する上では不可欠な材料であるが、全体を中世前期以前、中世後期、近世にわけてそれぞれ2例ずつを検討する構成の都合上割愛のやむなきに至った。これらのほかにも本来であれば取り上げるべき事例は存在していようが、現段階において筆者が参照しうるものに限らざるをえなかった。

しかしながら、異国観という題材のもと、土浦を中心に関係情報を集積したものとしては、本稿がはじめての試みであろうと自負する。今回素材とした史料自体は、相互に直接の継承関係にあるとは考えがたいものであるが、将来的な事例の集積による体系化を今後の課題としたい。これを契機として、関係研究が訂正増補されることを祈念して止まない。

（いがわ・けんじ つくば国際大学 非常勤講師）

## 《参考文献》

- 雨谷昭編修 2015『土浦関係中世史料集』上巻（土浦市立博物館）  
網野善彦 2008『日本の歴史00「日本」とは何か』（講談社学術文庫）  
ヘロドトス（松平千秋訳）1972『歴史』中（岩波文庫）  
平野多恵 2006「『沙石集』明恵関連説話の情報源」（小島孝之編『説話の界域』笠間書院）  
洞富雄ほか編注 1988『東韃地方紀行他』（平凡社東洋文庫）  
茨城県史編さん中世史部会編 1970『茨城県史料』中世編1（茨城県）  
伊川健二 2009「鉄砲伝来の史料と論点（下）」『銃砲史研究』362  
伊川健二 2013「鉄砲伝来伝説の系譜」（宇田川武久編『日本銃砲の歴史と技術』雄山閣）  
石川榮吉 2006「日本人が初めて見たポリネシア人」『国立民族学博物館調査報告』59  
石井進 2005「『兵』から鎌倉武士団へ」（石井進著作集刊行会編『石井進の世界』2，山川出版社）  
岩井市史編さん委員会編 1996『平将門資料集』（新人物往来社）  
川尻秋生 2009「将門記とその時代」（川尻秋生編『将門記を読む』吉川弘文館）  
前田雅之 2008「三国観」（小峯和明編『今昔物語集を読む』吉川弘文館）  
三好唯義 2010「『三国』から『五大陸』へ」荒野泰典ほか編『日本の対外関係』6（吉川弘文館）  
新治村史編纂委員会編 1986『図説新治村史』（新治村教育委員会）  
西岡虎之助 1984「日本と呉越との交通」『西岡虎之助著作集』3（三一書房）  
西尾賢隆 1999『中世の日中交流と禅宗』（吉川弘文館）  
大橋與一 1974『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』（東海大学出版会）



- 志田諄一 1997『常陸国風土記と神仙思想』（筑波書林）
- 東京大学史料編纂所編 1973覆刻『大日本史料』6-22（東京大学出版会）
- 土浦市立博物館編 1989『山村才助と蘭学の時代』
- 植田樹 2000『コサックのロシアー 戦う民族主義の先兵』（中央公論新社）
- ディヴィッド・シンメルペンニク＝ファン＝デル＝オイエ（浜由樹子訳）2013『ロシアのオリエンタリズム』（成文社）
- 山村才助 1979『訂正増訳采覧異言』上・下（合同出版）
- 山尾幸久 1998「継体大王論の論点」（まつおか古代フェスティバル実行委員会編『継体大王と越の国』福井新聞社）
- 柳瀬喜代志ほか校注 2003『新編日本古典文学全集』41（小学館）
- 義江彰夫 1994「日本の反逆と正当化の論理」（小林康夫・船曳建夫編『知の技法』東京大学出版会）
- 湯浅邦弘 2007「戦争神蚩尤の伝承」（『戦いの神—中国古代兵学の展開—』（研文出版）
- 和田千吉 1904「常陸國新治郡東城寺村経塚の研究」『考古界』4-5

## 註

- 1 契丹である。『遼史』には、この事件が「渤海国を改め、東丹となした」と表現される。
- 2 蚩尤伝説については、[湯浅邦弘2007]に詳しい。
- 3 東城寺は、『沙石集』の記事のほか、常陸平氏の平致幹<sup>むねもと</sup>が大檀那として登場する保安3(1122)年および天治元(1124)年の年次が記されている経筒が出土した経塚があることで注目されている。
- 4 近年の研究成果から、天皇号が成立したのは7世紀末の天武天皇の時期であることが明らかにされつつあり、さらに下った時期に諡号が一般化したことを考慮するならば、この時期の君主を「天皇」を呼ぶことは必ずしも適切ではない。また、後述するように、歴代の天皇を何代と数えるかは、その実像をいつまで遡らせるかという点とも関連し、さまざまな議論がある。しかしながら、本稿の主旨はそれらの実像を精査することではなく、『神皇正統記』の記載内容を理解することにあるため、行論の便宜を重視し、これらの問題を捨象し、『神皇正統記』の記述にしたがい代数を記し天皇の呼称で統一する。西暦との対照も同様である。
- 5 現行の天皇表のなかでは神功皇后の即位が認められていないため、第25代とされる。
- 6 フリガナは、原本での有無に関わらず、現在の地名表記による。
- 7 [土浦市立博物館編1989] 36ページでは、才助の直筆とする点に疑問が提示されている。
- 8 近世における世界観の変化については、地図を素材として[三好唯義2010]が論じている。

## Some Premodern Examples about Foreign Images in Historical Sources Related to The Southern Part of Ibaraki Prefecture

Kenji Igawa

The paper intends to survey foreign images among some famous historical sources as Shōmonki 将門記, Shasekishū 沙石集, Jin'nōshōtōki 神皇正統記, the documents of Hōunji temple 法雲寺文書, Tōdatsuchihōkikō 東韃地方紀行, and Teiseizōyaku Sairanigen 訂正増訳采覧異言. Although all of these texts were not written in Ibaraki region, they included typical foreign images in each period from Heian 平安 to Edo 江戸. The change of the images will be clear through the textual analysis of them.

Keywords: Foreign images, Ibaraki, Dutch studies, Zen Buddhism, MAMIYA Rinzō